マシュージン

JAPN 402

最後の読書感想文

春２０１4

「セロ弾きのゴーシュ」

私はセロ弾きのゴーシュという小説を読みました。この小説は1934年に著わされて宮沢賢治によって書かれました。1982年に、高幡いさおさんによってセロ弾きのゴーシュの映画を使えました。高幡さんは宮崎駿さんとスタジオジブリを使いました。1994年に小説が英語で翻訳しました。

1896年に宮沢賢治は花巻市岩手県にうまれました。そして、1918年に岩手大学を卒業しました。宮沢さんは経験な仏者であり、菜食主義者であり、活動者です。小説で宮沢さんは道徳教育を教えるのを試みたいでした。宮沢さんは作家になった前に彼は先生です。風変わりな人だそうです。また、クラスを教えた時教室の外に教えました。1933年に肺炎で死亡された。セロ弾きのゴーシュは宮沢が亡くなった後で著わされました。

セロ弾きのゴーシュの主なキャラクターはゴーシュという人です。彼は金星音楽団でセロを弾きます。真面目に練習すろのに、セロを弾くことがあまり上手じゃありません。毎日、音楽団と練習後、家に帰て、もっとセロを弾くのを練習しました。物語の舞台は無名の町とゴーシュさん家と音楽団が練習する場所と音楽段が演奏する映画館です。たいていの話はゴーシュの家と音楽団練習する場所にいました。

ゴーシュは金星音楽団でセロを弾くが、あまり上手じゃない。楽長は彼をよくしかる。一週間の間に,ゴーシュさんの家でいろいろな擬人化された動物はゴーシュさんに良いチェロリストになるための方法を教えた。最初の晩、猫はゴーシュさんに訪ねて、トマトをあげて、曲を演奏してくれてと聞きました。ゴーシュさんはもらったトマトが自分の庭から来ました。そして、アングリになって、「印度インドの虎狩とらがり」という譜を弾いて、猫を追いまくりました。次の晩に、鳥はゴーシュさんの家に来ました。ゴーシュさんは鳥に何が欲しいと聞いた時、鳥が「音楽を教わりたい」と云いました。一晩中、鳥はゴーシュとスケールを練習しました。第三の晩に狸はゴーシュとタイミングを練習しました。第四の晩にねずみはゴーシュさんの音楽がねずみの子供の病気をなおされると言いました。その後でゴーシュさんはセロを弾いて、ねずみ赤ちゃんの病気をなおしました。一週間後, 彼は音楽団と一緒に演奏しせいこうした。パフォーマンスの後、ゴーシュさんはアンコールをするよう頼まれました。「印度インドの虎狩とらがり」を弾きました。彼は、ようやく成功していました。

私の意見について、私が大人になっても、子供に ついての話が好きです。私は音楽についての話も好きだ。僕が児童書を読んだとき、僕がいつの子供であったかは懐かしいと感じさせます。。面白いポイントは違った動物と毎晩違った練習をした。鳥はゴーシュがスケールを練習するのを演習して、狸は彼にタイミングを教えて、そしてねずみは彼に音楽の大切さについて教えました。よく分からないポイントは難しい文が多くあって何を教えているのかよく分からないけど、学んだこともある。僕の意見で、話のテーマは我慢し、いらいらしないだし、ほかの人からの助けは大切だ。